朝倉新話

神田旅籠町壹丁目拾番地
三河屋喜三郎

ロ g
1352

朝倉新話序

守ることを約にして施ことを博きものハ善道なりとや吾菘庵先生人を教ゆるや学者をして固有の本心を知らしめ是に率ハしむるの外他事なし是を存する時ハ自ら敬となり是に率ふ時ハ施知らずして義に合すといふ事なし其学知至簡にして人従て学易くまた功甚多し是をもて嚢を擔ひ笈を負て四方より至るの徒宛市に似るが如し日毎に益を請ひ競て疑を問ふ先生これと論て倦ことなくまた両端を叩ひて竭せり玄統側に侍りて竊に聞処を

神田旅籠町壹丁目拾番地
三河屋吉三郎

1352

輯録するに免へずして冊となせり頃日友人何某
これを梓に上さんことを勧む　玄統曰先生の言辞これを
殺ぶ時ハ其中自ら深きいわれあることを以て今この冊子を
録するに其意味を失んことを只恐るのみ　俚しき諺拔
りてハ猶さらなり　玄統が不敏なるハ角如校謬誤あらん
ことを恐る何ぞ他人に示すべけんやいかにとなれバ曰学ハ
道を学ぶのみにして浮華の文辞を本とせん且これを
世に公にせんといふにハあらず只二三の兄弟に頒ち吾
掌聞ことを博むるの一助とせんハ又よからずやいかとて
しく拒めるも其の固き　玄統辞するに語なく遂に

剞劂氏に命ず見る人言辞の拙きを捨て其意の
深きを味ハんことを希ふ先生始め居を平安の東郭
華頂山の下にトし終に坊庵を結ぶ因てひと
東郭先生とよぶ又或ハ坊庵先生とよぶ久しからずして
居を朝倉の街に遷し教授大に行ハる故に此書を
題して朝倉新語といふ維時安永庚子五月望

門人有山玄統謹序

朝倉新話

門人　有山玄統謹識

東郭子曰　民と業ふハ紛れざる通をするといひます
別に奇怪ヿでハござりませぬハイ　百性なれバ田畠を作り
職人なれバ其職を精出し商人なれバ商ひに精を入れ
何でも皆それ〴〵の民を尽す而已で他のヿハござりませぬ
是を学問といひますハイ　今多くハ商人なぞの学問
するといふを見れバ博書籍を見て文学の穿鑿而已
して容儀を矯飾ありて今までの商ひをも止
また次ハいらひ差錯あるヿでござるハイ商人なれバ商ひを

しそ。たゞ我家業をよく勤むるを学向といひ
ますハイ
又曰此方の学向ハ本心を知らしてさへ知るゝ本心を
遠からねばで何も煩多なことハござらぬハイ本心を知て
かるハ孝弟が行ひ易うござるハイ本心を知らねバ行ひ
難うござるそれで。まア先へ本心を知りするそでござる
ハイ又神儒佛ともに在ハ一ツでござつて此本心様
知るより他の事ハござらぬハイいまだ知らぬ衆ハ皆
左様心得てござるぞ知る様まさッしやませイ又知りまする
衆ハ煩多なことハござらぬちと知事ハ私案なしの本心ホ

たがはぬぢやらでござるハイ不案是を大事とさつしやらば
察量次第で聖賢にもなられまでござるハイ
或問曰本心を知られよとおッしやりますが性を知れとハ
ちがひまするかの
東郭子曰本心といふが性といふも何も異ることハござらぬ
ハイ性といふハ何と心の根本で天のまゝ此所をござ
つて是を天理といひます其天理を人の身に具へて
いまする所でそこを性といひますハイ其ぐ此性ハ
いひあらハされぬものでござつておしでも顯ますこ
所ハ情といひますハイ又行ひ心といひますまや善心も

あり悪心もござれども本の字をつけて本心といひ
ますぞや根本の性の通りにあらば心も皆善心に
成まして性と何もかはりはござらぬハイこれをなに
たとへていふて見ようなら水ハ冷く清ひものでござつて
能物をうつします丈なずれてゐるひうつへハゆきませ
ず方器へ入ますぞや方になり円器へ入ますぞや
丸くなる計揆との道理を早く具へていますれども
其道理ハどうも出して見せますまい見せられませぬ
本ハ性でござるハイ其為の揆くあるハ働きを合せて
いふ所本心といひますハイ人の本心ハ為が通に極能似まし

さるのでござれども為ハまごゝとをといふ色形がござるが
本心にハ色形といふ者ハ絶ござらぬハイこれハなぜ
たとへ物がなさるにやむるとゆず水にたとへていふまでの
ことでござつて水に何も用ハござらぬもしあやまつて
水のやうなものと云ハしやツたらバ是ハ大きに差ふてで
ござるハイ故為にしを無理ハござらぬそこが本心の
仁徳と同じことじやハイ為ハ流れてゆく善の方へ行
流まへらぬ所ハらずまま方器へ入てハ方になり円
器へ入てハ丸くなるが即本心の義と同じことじやハイ
又為ハなるひ方へハおしものがらぬハ本心の礼じやハイ

水ふ知恵ハあらそはれませねど些一くの差別よく分りましてちッとも誤ませぬハ本心の知と同じことじや何と水ハ態本心に似たものでハござらぬが本心を知て本心のまゝでゆけバ水と同じやうな成ますれバ何とされしでもまひでハござらぬが

或問曰私案とおもひとハ異ふとおッしやるがそれハ如何しこりでござりまする

東郭子曰此方の私案といふハ安排布置の事でござりて何事も此方から作為するといひますハイ何ほども私どもハ皆私案でござるハイまるで本心を知ふとおもひ

流れするうちに本心ハ如此ものじや如彼ものじやのといろいろに思ふハ皆私案でござるハイさうでハござれども信実に志りまもひくと思ふやござらぬかしおもふハ私案と異ふて少しも滞らぬものでござるハイ其思ふものと私案とを譬ていはゞ思ふといふものハ流るゝ水の如なるもので常に絶ぬものでござつてそれを思ふてやらおもハぬやら覚えぬやうな者でござるハイまた私案といふハ流るゝ水を氷りたやうなものでそこに凝り滞りますれバ必ず心よ覚えませぬハイ又他所へゆかんならぬ用があつてもとおもひませぬそれハ私案じやござらぬハイ又そこで

懈惰が出てくるハ我儘ならぬ事じやがとおもふのが
私案でござるハイはじめから思ふてこゝろの覚えしぬ
なけをいふてこなたも心へ來と思ふて門を出る
からこれまで始終來々とおもふていかつしやれども
思ふてやらおもいはぬやうに覚えてさつしやるまいなんと
さうでハござらぬが此时不圖途中で誰ぞが通を
するハならぬと沮そうし何卒我をひるすじやがとてこ
てゐふて居る事が顯れましやうがや只皆の氣に本心を
知らつしやましといふハ別の事じやござらぬハイ本心と知て
からハはじめいふておもひハ流るゝ水のやうなもので私案ハ

これハ氷ツくやうなものじやとおぼしめしませんそこでこ
ゝのこゝろがぬされバ氷らぬやうにするのでござるハイ
本心を知りますやなんぼでも氷らぬまへにこほらぬやうに
さゝるがでけますせぬハイ
東郭子曰我本心にハねつからの逆ハないものでござるハイ
本心を知らぬものハ本心ハまがりなものなれバごみのやうに心を
枉られものゝやうに思ふて居ますれハ愚なる事でござる
ハイ是を本心に逆ひもぬるを譬ていふて見ますならバ
本心ハ流るゝ水のやうなものでござるハイそこへちよッと細
物をつけますれバ支往細浪が起ち巨物をつけれハ支往

巨浪が起まするやうなものでござるハイ　ちつとでも私とする時ハ
それゆへどうで彼の因ハなんぼでも合点志ませんぞッと
其通りに成ていやしませぬハイ是が表へ見えぬものじや
されど我獨りハ能志れるものでござるハイ又獨り斗でも
いへませぬ表へも能志れるものでござるハイ商人が商ひ
ぎらひで隠遁などすれバ人があの人ハ奇怪なものになすつた
と見る人や人が評判しませんハイ皆人がなんぼでも氣が
きまぬ由へ窮屈なりて見てもなまに成ていやしませぬ
ハイ皆見る人や人も心ハ浄罪爲まりませんハイさうじや
ござりませぬか

又曰本心を知りますと先ハ故先生の御恩と有難う存ハッ
しやりませイ這様なるが又何方にござらうぞひの何方でも
知れる事じやとおもハッしやるであらうが左様じや
ござらぬハイ是も幸に此筋へ出あふて御恩を受まや
如此事を知るものハなまりませぬハイこちの方でハ彼も
知る是も知るにおよんで沢山に思ハッしやりませうが縦令
千人や万人知つても天下中の人でハ何かとてもござらぬ
ハイそれなれど大切なる事を知るといふハまどうひ事に思ふ
て不残此事を志まぬやうにさッしやりませイ本心を知る
ことハ誰をお互の苦労して知ッてそれと何方でも

誰も如是(かう)したものじやと思ひ沢山さうにおもひまして
て折角(せっかく)知りましたハ知ッて長養(ちやうやしな)ハぬものが多(おほ)ふござるハイ
本心ハ義が合点でござる義といふハ心の中(うち)に微塵(みぢん)も
恥(はづ)かしきことを言(いふ)たり行(おこな)ふたりせぬをいひますれバその
不義をすれバ本心にものを含(ふく)まぬ様(やう)なものでござッて
大切なひ本心と思ひ饒(うや)して失(うしな)ひましたハイじやによつて
よつて常に何なりといふもするも義かふ義かと本心
に聞ふて不義をせぬやうにさッしやりまセイ是を故先生
も不断に大事じやとおッしやッた事じや常々
きゝなひて大事にかけて損の中にかしを恥(はづ)しき

ことのないやうにさッしやりまセイ
又曰本心と知りましたらバ本心の貴(たふと)ひ事をひたと纔(わづか)
究(きハ)めさッしやりまセイ此貴ひ事がとくと究(きハ)まらぬ故盤桂(ばんけい)
和尚も仏心とかの様に志らくなとおッしやッたとおもハぬ
かういふかの様に仕らくまれハイ此本心の貴ひ事さへ
纔(わづか)究まれバかの様に仕終(おほ)る事ハござらぬハイさらく
余の様が悪ふて求めなむ心がある故かの様に志らく
ますハイ是ハ皆此貴ひ事がとくと究(きハ)まらぬ因でござる
ハイ溺(ひた)と究めねバならぬ事じや
東郭子本心を知りたる門人に示(しめ)して曰眼(まなこ)まるることを

なんにゆび指とはくずといふことを能く工夫さつしやりませイ
又示して曰不知は我ハ何者ぞくとみづから問て
みづから答て能く究めさつしやりませイ
東郭子本心を知らる門人に示して曰大かた
誰も常住物を私案なしにみるものじや私案なしに
学ものじやとせきをしまして左様せねばひとつ私案なし
なるものじやのに是でハ私案なしなるものとする継の目が
おりますれば扨まごとを先初心のうちハそれなりに覚えて居る
なひくと究めさつしやりませイ是も初ハ私案なしなるもの
じやとする目がござりましてもそれを忘れねバ私案なしの

目と離るゝ事ハなりませぬハイ私といふハ私案の造作
じや此私がひよくと究て居るが要な敬でござるハイ
程子も敬を主として敬せよといふ事なしとおつしや
ツて私案なしなるものじやくと通と究め見や後にハ
私案なしなるものじやといふ事も忘れて行住坐臥せまし
いずれにひとつ私案なしになりましたハイ扨往古から
当時今までの事ハ皆消てしまひましたハイ是から
後の事ハまだ何も来ませぬハイ是端的今なる
なるのでござるハイなぐ如是して居りや如是して
居るばかりで何も奇怪な事ハござりませぬハイ又誰でも

まくた唯とおもひましてすぐぬ前から唯諾せうと
おもふて居やしませぬハイ是を能く得さッしやりませイ
又日々を顧ざるげゆるものでござるハイまづ煙草
呑と欲ひますりや手に煙管が安に居ると思ひ
ませハイそこで煙管を取れバ煙草袋が側に居りまし
と申ますハイすれバ煙管の火皿がこゝへはいりやれイと
ひませんハイ一切の事が一ツとして此通でなひものハ
ござりませぬハイ万物が嗚呼ますれど除て其外には何も
ありやしませぬハイ只売来る物をくれ悲る而已な
そのでござるハイ是と能思ふてみなさりやましイ

又日こそ今元能くんなさりしやましイむかしくから暫時今
までの事も皆消て去ましたハイこれから後の事ハ
まだきませぬ即今而已なるものでござりまして端的の心
でござるハイ扱もひと口でいふなれバ昔から這様なもので
ござりまでも盡期ハござりませぬハイそんなら能くひといふ
なら能ひとこそ又今如是いふも消ましてはや去る
ゆり消て来て一瞬の間を住る事ハござりませぬハイ
目かしも事物を能く露ハきえのこるでもわるがむりし
是れ此世に於て生ありへきといふ事が有るがござるから通りて
ござッて誰でも安に一瞬の間を於ける住るものハござりませぬ

ハイ今如是いふも早消まして一瞬も留る者ハござらぬハイ故程子ハ生息而已とおつしやつて又如是いふ時ハ暫くと生じてハ生じ生じてハ生じまして死るとも生じて往ざる者でござつて盡期ハござらぬハイ是がよう合点がゆきや利欲を発して物を求め貪らう様ハござらぬハイ

或問曰人の嘘吸も風も同じ事でござるか風ハ吹きりでござるが人の嘘吸ハ嘘て吸まする是ハ如何した訳でござりまする

東郭子答曰天にハ口がないによつて吸やしませぬが天も風のやんである時が吸ふようなものでござるハイ故それハ左様じやが人の氣息ハやはり嘘たり吸たりすると思ふていさつしやるが日ごろなど能おもふて見まするに人の氣息も出る斗な様な者でござりません

對て曰さうでござるハイ人の氣息も全體ハ出る斗と云ぞ出るちからなやうなものじやがへ引くハかへ出るなら肉へ引くハ肉へ出るといふやうなものでござつて天地万物皆出る斗ぶして又ハ程子も生々而已とおつしやつて生じてハ生じ生じてハ生じ暫時の留るをやすんぜず

までも生じてありてござるハイ世の人が死ぬる
とおもふてゐるこれしぬるのを生ずるのじや物の欲
出来るハ物の生ずるのじや欲なくなるハ空の生ずるのじや
何とかういへバまことに生ずるちがひじやござらぬか
或問曰一休和尚が肉で蛸を食ふてあるなへゆゑ。さうで
偽食してこそ蛸を嘔吐されたまへバ亭主の申まするハ
これハ坊主の姿して蛸をくふものかと。さんじふ
いわれましたれバ一休が身どもハ蛸ハくやしませぬとおツしや
ツたれバ亭主が申すそれでもたしかに食なさツたるや
ときハ嘔吐しやツたと申ましたれバ一休のおツしやるハ
これハ浄土宗の善導を見さツしやらぬかあれも仏と
くやしませねど口より嘘しやツて身ども食ハしませ
ねどもはきしやしたとおツしやつたといふてござるが
是ハうそむきにおツしやツた事でござりませうが
東郭子對曰いやたゞむまふおツしやツたるじやござらぬ
一体ハ虚言を吐さツしやりませぬハイ實に食しやらぬ
ものを誰がさういふたぞ食たといはれませぬハイ
さうじやこげられぬが一体ハそれや蛸ハ正く嘔吐しやツた
でもござらふが決而根から食ハさツしやりませぬ事で
ござるハイ

或問曰聖人ハ変るしといひませんが教も変も見さッしやませぬ事でござりませうか
東郭子答曰聖人にハ私案ハござりませぬハイ私案がなひ故ひとの教るといふ隣ハござりませぬ鏡をみると同じ事でござるハイ
又問曰私も本心を知りましてから兎角此身を不知味ふやうにいたしますとねじまんでござれども息を忘れて居る事がござりませんが此時ハ放心あることかと存てござりませうかの
對曰いかにも放心して居るのでござるハイ実に忘れて

それバこそ然ども其時ハ瞎盲でうか〳〵と無益いろ〳〵の私案して居て立志もせぬこと故我しおぼえぬのじや何とも放心でわるまひが為に此りすまするのを大かたに放心でござるハイ私案なしに天気いふといふ事を不知に味ふやうにさッしやまイとかく如是話て居るハ如是話て居るぞろうてなら放心でござるハイ
又問曰私も生る竹肉の継を見るに其時ハ継なりけるま發て居るやうにござりましたが夫でもやはり放心して居るやうになりまセん

答曰いかにもさうでござる能とあるに皆の者ハむかふへ
心が移りまして此方ハ無主でござるハイ丈ハ能と見る
ものハ我なのでハござりませぬハイ心がむかふへ目がくれしま
ものでござるハイ聖人の心ハ物に従ひて宿りしませぬ
一方へ偏倚て此方の無主に成事ハござりませぬハイ去
心ハ鏡の如くにしてどこもかもを充塞ておる地ハござ
らぬハイそれ故聖人と凡夫との差ハ心がむかふへ移る
と此方へうつるとのちがひでござるハイ聖人の心ハ
むかふの物がこちへ移りて物来ハ物移るだけ物去ハ去
ることでござるハイ目なし掌に見へバいふところハいらぬ

だるまどの心のうちに何かあるべきといふ者の通りで
何でも端的撃バ鳴る撃ねバ鳴りませぬと同じ事で
ござりて此へ物のとどまるといふ事ハござりませぬよく
心が自由自在に能働きますればハイ凡夫ハ撃ぬに鳴り
撃つにならぬやうなものでござるハイ物のきもせぬに
移り又物がきそをも移りませぬハ只むかふへ心が宿りく
志まして其上へ心が着ました故あとへ残りとどまりて
自由がでけぬのでござるハイ
又問曰夜寝る時ハ其までを放心して居るといふもの
でござりまするか

答曰教ゑが教ゑでなひかハ見ゆるので知れるでござる
ハイ聖人ハ見てゐる事ゐる動となるぞ揺ふござりますや
ゑませぬ虫人正体もなひ姿と見さッしやるといふ事ハ
ござりませぬハイそれも秋をおもふかなんぞ思ひ日ハなりませぬ
しかござらバそれハ聖人でも姿を見さッしやる事ござ
ござるハイ凡夫ハ常住正体をなひるまでござりません
虫人正体もなひ姿見ます事でござるハイ又秘るる
姿見ぬ時ハそれハ教心でハござらぬ秘るのでござるハイ
又問曰私でも教る姿見えぬまいまん事がござるの
此時ハ教心でハござりませぬか

答曰まアそうでもござりませぬ是も細かにいひますりや
常く聖人と異や皆差誤でござるハイ是も人とおしへ
なすくにハ何事をなさき時ハ聖人と何をちがひハなひと
いひますハイ是も麁ふ時ハ又それに違ひもござらぬハイ
或問曰死心ともまに生死なき物ともうしかりいふて
ござりますとをますさしく生てる死てゐたれば此身を
生死なひとハどうも合点がまゐりませぬ是ハどう
した事でござりません
東郭子答曰それハ本心を知るや合点が申ぬまで
じや生死ハ根から絶なひものでござるハイまた鑑接ハ

祢ら私案せんでハ時節といふものがあるか皆なら
ごとにあるぞよ是を爰へ將來(もてござ)まイ
东郭子曰親に孝行といふハ親の心を安(やす)んずるじや
でござるハイさうじや家のうちハ否(いや)と云ふ事がわからうと
ゐるさへすれバそれハやつぱり是このでちがひハござりませぬ
ハイ心に忠(ちう)と。思(おも)ふれど不孝(むあんさ)といふてもそのまゝや不為(せぬ)
の心違(ちが)ひハござりませぬハイ人の頭(あたま)を叩(うつ)ておいてこちらハ
心ざさうハ押もちどと叩くといふてハすまされぬ
ハイ内外別かちのじやござりませぬ手を挙(あげ)るさへすれハ
挙(あげ)るの手と低(さげ)るそれハ低るのでござるハイその

從授(ゆあみ)ハ身を浴(ゆあみ)でもさますつもりや心を共(とも)に洒々(しやうしやう)と
さすん事でござるハイさうじやござりませぬか
或問曰主一(しゆいち)不適(ふてき)といふ事ハ如何(どう)なる事でござります
まい次
东郭子答曰主一(しゆいち)といふ事ハどんと私案のなき
時ハ天地と我と隔(へだて)ハござりませぬハイまた隔(へだて)ハあひといふ
私案もござりませぬそこぞ一ツといふ事でござりませねバ二ツと
いふ事もござりませぬハイそれを強(こぢつけ)ていふ時ハまア一ツで
ござる是を主一といひますハイこれ私案のないのハ
適(かくて)る事もなけれど来(きた)る事をござりませぬ是を不適(ふてき)といひ

ますハイ
或舎の来東郭子舎合の所に向ていふくむかし
八嶋の合戦の時次信の討死ハ此上もなひ忠臣じや
と思ハッしやるか又さうもないと思ハしやるかと
舎合の所曰誠に此上もなひ忠臣じやと存ますん
東郭子曰おまへが此上もなひ忠臣ハござりませぬか附
絶而深ひむけりし私楽ハござりませぬ又身代にたとへと
いふ者もござりませぬハイ判官殿に矢を不中しまして
おらの事でござるハイ謡にある通りけしもの
弁慶をおくれさうと皆々ちァあるがくと踴躍と

して私楽するうちに名をおくれしゆへでござるハイある
禅の和尚のおッしやるハ弁慶ハ奥州を出る時討死
しましたとおッしやッたが是も面白ふハござれど
それでハまそッと訳きませぬハイ次信ハ判官殿へ
ほんとに最期を見とすそきッさ人じやハイ
或問て曰一新の家が治りそあるハ何ぞ治りてご
ざりまする一口におッしやッて下さりませ
東郭子答曰忍の字一字而已でござるハイ往古唐土
にも此例がござるハイ張公藝といふ人ハ唐の世の人で
ござッたが先祖から九世を親類凡百人あまり一同居

して何のいひ分もならぬ着されていふ事でござる
ハイ其時分時の帝王が泰山を御祭なさろうとするがござッ
ところが次に彼張公藝が宅へ行幸なされて張公藝を
召出されなさるを御為がござッたれバ張公藝にまた紙
筆を授けて忍の字を百字書て書ましたといふ事で
ござるハイ。
或僕問曰近頃或禅僧の話で承りましたが往古
或知識が稲を刈て居さッしやるれへ或僧が来まして
和尚の道ハ如何じやと問ましたれバ其知識が此鎌ハ
三十銭で買て得来と答られましたれバ或僧が又申の

通じ問ましたれバ今でハほんの駒で快ふござりまして
知識の答られたとや事でござりますが先生の道ハ
如何でござりませう
东郭子曰先汝が道ハ如何ぞ。
彼僕曰御話しとてもおりまする
东郭子曰さやうのむつかしい事ハ予ハ知らぬハイ
かの僕曰先生のハ如何でござりまする
东郭子答て曰予ハ隠居の身なれバ本家の世話より
なりそいはれバ随分邪魔にならぬやうにするが予が道じや
ハイ汝ハまだの身なれバまだと大切に勤るが道じやハイ

或問曰尽心と尽性とハ如何でござりまん
東郭子對て曰盡性といふハ聖人の事でござるハイ
尽心とハ心を用る紀がござる丈で賢人の事でござるハイ
さうでハござれども心も尽しゆけバ性を尽しきる
るんすも異事ハござりぬハイ

或問曰男ハ冠をかぶるハいたしませぬに女ハ冠と
かざりをまゐるハ如何したるでござりまするが
東郭子答曰男ハ陽躰じややそれで冠とかぶらず陽を
およ求めぬハイ女ハ陰躰じややそれで冠とかざッて陽
を求るのじやハイ人の目で見りや織るものも結構な物
じやけれど天の目で見りや女の着るよりハ男の
かざらぬ髭が盛大て光輝のあるものでござるハイ鳥獣
で雄がきれいます見やッしやれイ人も男ハ天から自然に
文ゆゑて頭に鬚もあり全体逞て盛大なハイ女ハ
自然に天から文ゆゑかざりをござらず全体褊小て
光輝がなひハイさうじやござらぬか
東郭子曰兎ハ角をもたねバ滑しきぬもの
でござッて又おとをいずするおをゆるものがござるそれハ
聖人斗でござるハイ所が平生いひます私案と
おもひとくとかゝらずくる遠くさッしやる思ふハ本心

の道ですぐなものじやそれを私が出て枉ると私案に
いひますハイ私案こそ私るゆゑござれ人ハおもいやれバ人
じやござりませぬ人の身が硜々然で御りやバなりものからと
硜々然では迷惑じやハイならバ人の御のじやおもふべき
とおもふハ私案じやござりませぬならバまして事とおもふハ
それが私案でござるハイ静座する時も知らぬらく
とおもひ通しでなければなぬ本心ハ知れませぬハイ
さうなまと皆の流をひ續けまするとしれぬで
おまおもしッしやるハちがひてござるハイさで人ハ志るらひ
くと信實心に含衣おもひつめよとさッしやるまで

ほひに志れます其静座して居る時皆の流れハおもハね
と居るやうな事がやはりあらひくとおもふて居る
事でござるハイ又思ふて居るやうな事が私案でござる
ハイさて信實にあらひくとおもひつめおもひどをしに
さへなれバ自字知れますれバぢきにさうなりて工夫さッしや
るハイさうしてゐると工夫といひますおなじ工夫といふ
ことハござりませぬ何事に臨でも如此あらひこれを
いそます出来ますハござりませぬハイちよッと煙草を呑も
茶をのむにも神に呑しおもひいでそにのむといふ事ハ
ござりませぬ飯をくふ時もあるひハ汁を吸ひあるひハ飯を

食戒に菜とくひするにも列に汁次ハ菜と食汁次ハ
汁と吸しおもひハいたしませぬほどをおりまするにあまりを
食児とくひするすハござりませぬハイおもひハ思ハじんにゐる
やうなものでござるハイされバ何時をおもひにも営
されしませぬものでござる程にかならず次しも私案と
おもひもと紅ちぐ〵さッしやるる
或法生問曰顔淵曰願ハくハ善に伐るするなく労を
施ことなけんと論語にござりますれバ顔子も
善に伐りしやる事がござりませぬかるか
東郭子對て曰是ハよひ問じやなれども顔子でも

善に伐るの幾が後の中に動をとかねるハイさうじや
なれども身を省が善に伐るやうなものでハない後の
中に小實の毫末ほどでもきざみすのじやそれでも
善に伐るのに異ハないハイそれ故まづ意を用ひさッしや
る事ならばならぬまさッしやらぬハイ孔子の非礼
勿視非礼勿聴非礼勿言非礼勿動と仰
まうしたに顔子の此語を事とせんとおッしやるので
いまこゝろを用ひさッしやる事のあるすと知らしやれイ
又問曰孔子にも意を用ひさッしやる事があるやうに
ござるがそれでもないのでござりまするる忽老者

とバ是を安じ朋友とバ是を信ぜんお者をば、是を
懐けんとおッしやることなれバ是でハござりやう是ね
身ひさッしやる所がわるやうにござりまするが
東郭子對て曰孔子ハ何でこそあらうぞ孔子ハ素ふ
天じやハイ老者安之朋友信之少者懐之と
何事てハ我ハ知ることが通りじやとおッしやる事じや
是ハ素ふ天の流行じやハイ此ことバの絶であひ此言
語じや如何も何事ねバ人を知らぬふよりておッ
しやッたもので孔子をハ別ふ斯せうとおがしめす
是ハなかひハイ

東郭子或时宗建どのふ談話の次ふいはく
遡大古。今の暦の始りハ坂紀をみて知ることじやが
其大全體ハ何をみて知ることのじやぞいふてみや
是イ。
宗建玄続ともふ曰何をみて知る者でござりませうぞ
私等がゆめふ何しまそ出笑しかされませ
東郭子答曰先ず夜神暑りし次第ふ寒うなりて又
暑うなれバ又寒うなりして大際迄往て往ハ亦ごう
でも始へ復るもののじやそふなとおもひ暑ひも寒ひ
までの日の数を何ぞで験を付なそ毎日くの凡乃

日數で年と知られまする月の盈虧で月を知つさるのでござります皆何もかも技を推きはめて知るじやと孟子を仰られたハイ

或問曰七まがりの坂とすぐにのがるとやうすがござるがわるさハ如何しておのがるがなされまするぞ

東郭子對て曰直じやとする私案も直でないとする私案もあひ附ハどんなものじやぞ予が老友富呂氏もいはれたことがあるが七まがりの坂ハ七まがりの道の道をのがるがされねど直に歩る事ハなすひぞと

東郭子曰多く世上の人ハ欲を捨てハ商人ハ商賣ハかつゑ死やうなさうて居さしやるが大な誤でござるハイそれを譬ていふて見るならば彼多已登へ行道りやく何辛く下されませといふ盲乞食がござるが柳蘺裹と人の悪られぬ袖手伸しつき出しまして我が斬されバそれ米諸とそへとなふて居るがされと同じ事でござるハイ皆人も言通りて我が是程おすれバこそ金も殖ると思ひ貪が悪なるでござるハイ我がするしと一切我手でならとなふて居るがこちら味好いさのならそれハ家が肩のよひといふもので家力で是が如何して申くものでござらぬのさうじやござらぬ

さうじやといふても家が力でゆかぬものじやといふて
精も出さんと思ふてハゆかぬ只些分精を入れるハ
いまだ稼ハならぬハイ只欲を深して物を貪る無理
非道なる事をする様なる事ハ止にしたが善といふ事でござる
ハイ高賣の利もとるべき程とると非道とハいひませ
ぬ又紀州の椀屋のはなしじやといふて乞食がござつたの
是ハ歿しやれど其の中に慳貪に云ても唯といふて
忽ちなりましたハイそれでもみごと食て進てくれの
却で皆人が憐をうけ後にハ大きにどこでも米錢を
やる様になりましたでござるハイ商賣もさなり

でござつて欲んを捨て出来ぬといふ事ハござらぬつまる
べき程の利を得を欲とハいひませぬ掛直もいはぬの
欲心といふ事でハござらぬ無法を稼ぎるを欲とハいひ
ませぬ大槩稼ぎるべき程の事ハ稼ぎ出るが好ひハイ
掛直もいふ程ハ稼ぎるひハイそれも格別めつそうに
人の難義する程稼ぎるひでも大きな事なひ事でござる
ハイ又滅法界に掛直といふ事が利口なるそでもござ
らぬけ人欲を捨て見ますますや第一家といふものが
なりひやうになりますが我がなひ出へ家身代をしら
ぬませぬ家身と覚せぬにまで自然と家業を

無精なる事ハござりませぬハイ志ある家業に精が出る人
身と栄耀栄花に持ちたハござりませぬ身と栄耀栄花も
小持さぬやうにして殖ふとハ志ませねどもおのづから
銭金が殖る道理でござるハイ元来身の欲がなくして
よつて大食大酒をして身持を悪うせうやうハござりませぬ
その上に養生がよい故人寿命ハ延るといはずとも
おのづから長うなりますハイ扨又気を楽せぬによつて
家勝手ばくらかなしひ勝手ばくがなしひ故人家内で八人
楽しひ小無理もござりませぬ世間へ出ても人交りも無理
悦びがなしひハイじやによつて家内でも世間でも誰が

悪まふやうがござりませぬ是でハ善事だけじやあり
ますしてどのやうなむつかしひ親でも微塵もね
へハござりますまひ而して世間並の子を大切に覚へて
親なら猶以悦びじやまイでかなひませう説
この通りでござりて人欲を捨れバ善事だけにて
ござるハイ是を捨ふとおもへバ先家が大心我欲が徐
なりまぬる事でござる我本心を知りまして見ますまや
家といふものハござりませぬ我といふものがなしひによつて
家を楽せうやうがござりませぬハイ家と楽せひで その
かま何が欲が起りかぜ欲がなすけ形や今いふてある

吾る身だけでござる。ハイかうじやによつて皆なんをも知らずといふことでござる。急度すくをそおらず急くに志をおこして知るやうになされや
此時満坐の聴衆悉く感歎作礼し去る

○手島先生著述目録

子弟訓　益岳先生著	一冊	商人夜話艸　同上	三冊
塵ち里　同上	三冊	知心辨疑	一冊
坐談随筆	一冊	前訓	一冊
眠さまし	一冊	身体柱立　周防由房著　手島先生附録	一冊
聡隠居　岡田稔る先蓑　手島先生附録	一冊	町人身体直し	一冊
我津衛	三冊	安樂問辨	一冊
朝倉新話	一冊	目覚し用心抄	一冊
會輔	一冊	明德和賛	一冊
講義旨趣	一冊	問為學	一冊

女冥加鮮　一册
樞要　忠孝二字ノ鮮　一册
理學津梁　一名新実語教　首書　一册
為學玉箒　三册
太極圖說鮮　未刻
論孟鮮　未刻
至誠一貫之圖　未刻
東郭先生集　詩文和歌ヲ集ム　未刻

要草　手嶋先生輯　一册
絜矩　大学傳十章ノ鮮　一册
洙泗緊要　聖賢ノ要語ヲ集ム　未刻
答問雜話　平常門人問ニ答ル處ノ語　未刻
學庸鮮　未刻
徒然艸鮮　未刻
朝倉語錄　月次ノ對策　未刻
手嶋先生事跡　門人有山洸記　未刻

右通計三十有四篇

平安書肆循古堂治郎吉謹誌

神田旅籠町壹丁目拾番地
三河屋幸三郎

皇都書肆

麩屋町三条上ル二丁目
近江屋莊兵衛

神田旅籠町壹丁目[illegible]地
三河屋幸三郎